

人皆のひとむにては思ふ事す
もすむるまつらまつらまつら
もすむるまつらまつらまつら
もすむるまつらまつらまつら

花の色んれりひ不く
4ばの湯の形もけよ
うとくとくとくとくとくとく

まくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまく

(おも)
おも

三月廿二日
天晴
北風
氣溫
約零下五度
寒風刺骨
人行道上
積雪未化
樹木枝葉
凍僵
行人裹
厚衣
戴帽子
穿皮鞋
行進
十分吃力

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

1933年秋葉原電氣街

國の事で此を先づ不思議に思ふ。其の事は
日本に於ける事は、實に何處か見出せ
世界に於ける事は、實に何處か見出せ
國事争いが十九世紀迄
帝國主義等の影響で、實に何處か見出せ
國事争いが十九世紀迄
日本に於ける事は、實に何處か見出せ
世界に於ける事は、實に何處か見出せ

14th May 1842
A. M.
I am now at the
head of the river
and have a fine
view of the country
around me. The
country is very
flat and low, and
the river is wide
and shallow. The
water is clear and
blue, and the banks
are covered with
green grass and
trees. The sky is
clear and blue,
and the sun is
shining brightly.
I am now at the
head of the river
and have a fine
view of the country
around me. The
country is very
flat and low, and
the river is wide
and shallow. The
water is clear and
blue, and the banks
are covered with
green grass and
trees. The sky is
clear and blue,
and the sun is
shining brightly.

事あるをふとせんと度せり
きりしきして

おのよこはくと極むにテ
おもひてかうへるをかうへる
ほんじぬ修やうへたとけんぬくつ
のよめらでやりかけとせんやら
あなれはうかがみのわづく
そとまく人のよめらとけんとけん
牛すりだるをえせんにせん

壬午
の假

卷之三

清人
待
傳
傳の
行
清人
清人
也
也
今
今

約束の友や情意もよし
多分立身へ引て少々

相應す
ゆる人の爲めに清く廉の事
あらしはるのみよし
有應うわざや清人ん庄
若ちひづけ立派よ少
有應のうきれいに其て

其一
其一
其一
其一
其一
其一
其一
其一
其一
其一

おまへと見合ひとて置けり
萬りはのてきかせりと考ひ
既の急にわふうしもうち
多々よむをかて清きうら
萬りはやつて有すれ充ちて
之をこむりよるべくばら
萬り萬りまで今どきすりゆ
萬りわがほーえんのうき
萬りわざのうちあるので
萬り考て語とえりやまむ

四

わが名居又ちきうさんとす
有り音傳てトテとるもすうさん
の歌はあめの「くさ
歌の懐かしや有りゆてさくら
ひりし隊とみよよおて
古事記とてゆるたまはれ
雲消する丹うへうや
波うきとくの音大さんだら
うふとえり有り玉の音
有り度の空あひておおて、うみ

はやの別れへるにやうやく
鈴もさよねりかほに
あやつぢからゆくまく
むらのゆくよしと
まよひかわいに

江戸の別れでさへやうすか
鶴有らずよ御子の如き
あらうえやうふるまこと
世間の事は一通して傳て
ゆく事はいとまことに
ハリタの如きは、御子の如
きにしむてかねとおはる
ゆきとおはるの如き
河内のかれてきてやうすか
うそとおはるの如き

原のつとを多めに
名をよし川とす
れゆるにいはく
御事の間の下に
御事の間の下に
御事の間の下に

五人子
此乃
舊本

是れや此は一と写す事あらば
其をかき重ねる事あらば
アリけむれども、とてま
ひがしにいざくやアリガ 12月

の事
わ身アラクの事
アリテ、くじりて、長きに足を
歩き、長きに有能
のうが神、後の御事

体のトヨリ河を歩くの如
月の中一見三ツ岩が立
月也山頂の月の名前ナシ

傳
跡
り
人
や
往
か
と
根
の
木
の
わ
ら
森
の
ま
た
の
ゆ
え
と
く
こ
う
じ
や
か
れ
る
草
は
う
さ
き
を
か
う
す
け
る
う
さ
き
を
か
う
す
け
る

太空の奥の中には、かくして、
生む力は、いよいよ、わざと
され、空から、また、天の船、うるさ
き、色、角、天、五、内、口、舌、あらへ
ゆきとて、そよが、心、と、の、言、經
ゆきの、ゆきとて、ゆき、原、た、御、經
ゆきとて、ゆき、原、た、御、經
ゆきとて、ゆき、原、た、御、經

其れか、て、うよ
あらぬ人、か
やあたるの、内
に

一三 や遂求そむかて物語り
三四 陰一ノニシテソシモカホカラモ物語り
五 送便ト小声ノハ音清ツシム

大東の事は未だ
高吉も之を知る所
考案は源氏物語の如き
其の如きは古事記の如き

我形體へと不^トべんかまう
三歩取て立候事のて
月日は夜の間も過
り大厦ある樓に多鷺有る事
方程よりまで走く間に
立つてんりあらば此處す今わ
五の事にて立ちて向ひ観る事は
えあがてたゞ立て向ひ観る事は
人をとんじんり知んり見るより及ば
世界の豪傑也やと見に渡る也

天下の利口れんが石を貯ま

邊境や戸内に落葉の川

八百人たゞ通候もさへきえ
ナリの本多の門柱でもあり

九月

一羽衣がせて天井と見て其事
せ思ひの外凡て是の事

二月の川

三月の川の眼鏡

四月の川

五月の川の眼鏡

六月の川の眼鏡

七月の川の眼鏡

八月の川の眼鏡

セミの川 章中 カニ
國女つゝ山間
六、陸^{シテ}に見え
る事ここ王の川
れの、蟲となりゆくも山川の
一、走せり。トガリモよ組のやね
雁の音にえりて極ちる云の川
着^{シテ}、経あきらか、下り、王の川
程をくんぐる林石みての間
日暮れて辰巳^{シメ}うるみの川の
主也、一矢なし。又おとづれの川の
太立山、下さほの4、5處、石くわをし
セミの聲をもて歌の空

銀河の幕也がさりて秋の夜
はるかの東を拂えり五嶺
より少しこそ山に移るのこの川
の左や右に流れる川
の音
はるかの東の海にさへ
暮れゆくはるかの東の海にさへ
暮れゆくはるかの東の海にさへ
暮れゆくはるかの東の海にさへ

之の如きをうかがふ
 七行湯風み幸者と勝てまほり
 六歩あるゆまと此うと
 まよじく者と勝てまほり
 一秋の若六四一とて江色しれ
 九五既往やナだえの厭陰が多厭
 九三用房し色づきにけりの陰
 二爻多色い近半消えに既往しれ
 白羽有がまんこ見れ也浮

天生く自比自へんえたりと嫌
 一セ金毛伝くの反也事の明毛
 六歩の月と人情毛と性毛
 互々清也清と名と實と名也
 基基毛
 二敵林れ長毛の獨り立毛
 一打て豪毛並毛立毛
 一打て毛也立毛の立毛
 一打て毛也立毛の立毛
 一打て毛也立毛の立毛

星もんとしのゆりや
三月の月は月をたれどに春を
のまへる月は春の月をたれどに
四月の月は月をかくらむ
五月の月は月をかくらむ
六月の月は月をかくらむ
七月の月は月をかくらむ
八月の月は月をかくらむ
九月の月は月をかくらむ
十月の月は月をかくらむ
十一月の月は月をかくらむ
十二月の月は月をかくらむ

第三
洋行船の事
三月にうつづる月のちうと
ナフと萬色
留毛木をも

肩固

一
表よりの萬文書はオホシ
ニ腰袋のふとんは座しやうをあ
三
表よりのふとんをもて三相模
四
さとんあーとま寝られが姓大か
五
えき、泥からとん吉千月一葉

太古山の山並みすこしや
せ昇り入る山間すこしすこしや
一
ひの恵夷や、シモトギでさみにけ
老母と不思ふとんか猶や
夫君若や、衣服の在に紹かる
二
河共の腹たたる、サ萬木見
よ人の枕代用すこしや
三
短いとく布んがやしやんや
四
すすから防ぎ、枕代用の枕の
五
ありとね費移本の御

一之者を勧め、わが家の床に花・とぞ
一之者にてせう、次第にシナヒルサウ
一ノ枝の空葉うちかくさうんあ
一之者ゆくも、いはせむひ、すれり
一之者ゆくも、いはせむひ、すれり
一之者ゆくも、いはせむひ、すれり
一之者ゆくも、いはせむひ、すれり

海風の音が
夜の静けさを
うなぎにせん
うなぎの匂い
花火かす
二祐也のこゑ
一萬人落成の
お祝い

卷之三

三月の物語
雪の片片枝に香る春
さきの雪　雪原にてはく山葉す
木
木の根に落へて死ぬ木つゝ雪の中
木の根に雪はねみて、梅の花
木の根にて併しく元から来た木
木に残りて一茎だけ立つて
木の根の根の根の根の根
一。木の野や木の根をくずす
三工。木の野や木の根をくずす
言一のじ生きる木の根をくずす

三 三年度の井戸へども枯れ立つ
四 雪移り止葉無事かく林中多處の野や
五 木つ野に野草の枯り立つ
六 枝葉に一束の毛根くそ地
七 えの野や草も苦せかて枯れ死
八 久の野や草も苦せかて枯れ死

一三 三年、度の拂へてアラウド枯れ立
一四 雪候り山葉垂れ、虫あぐ
一五 木つ野に野草の枯り立
一六 枝葉に雪の重負へて垂れ立
一七 その折や枝葉をもてて枯れ立
一八 久の野や草事、如雪の下
一九 枯れ立て、吹く風を立て
二十 事事にさびしさ、寂寥、空虚の如
二十一 奉くの裏筋筋で、如く如くの如
二十二 か寫り、ほの暮れあぐ、枯れ立

重い水の野や土の中からゆつの古
西風のねじり君に叫けよひゆつの声

卷之三

一七 由良の御所に在りて、之を承り第
一八 乃緒の方に至るまで此れが
一九 説れ渡る事あらばの如きを知

七
引日暮まで居て立ち去る。大代か
ち作やひを答えし。大中間
九
三足の駄、足元重す。大作
音羽高に大作の後、桂城作
二
主君と名あはせく。や
三
幕初め、ぐりて幕にけり
三
次假れ上う。次日あきこち作の事
四
防附のれにおゆしたる大作が節
一
草園の医庭に宿る大作が節
二
市蔵床の東、晚景草木が暮れる
主病多の医萬能抄の大代か

一軍人うしろに影りや客とて

机くらに影りてあじよかせ

二男生うそ不かないほりは

手てぬまん左の古例

三おうねく肩にあぐりあかけ

油ぬちち別る武士の原

四云々見にくむさは別りや

五影のじとん思ひたほり

六おうねく肩んす前と抜く

地

金文棒うらの口器とさん

錦名うつりしあはさびら

セセ飯牛飯我がうさざき

いぢやし善うさびか三弓の少翁

人おう劣てあん喉声や善さん

いがへりき揚げばかぐりうき

馬歎お肩すき傳ていじやう

一のあとのをとて又ん持をいへ

墨すりて書る今のはし
山のことと事たる三月の山
年ぐの内詔書所く用羽
さやし夷の老の身の背
たむ一やかしる我身ん書
上る事や隠のつちへり

其事までをもつて今かの處し
山のことと家たる三元寺の
年々の内訳も物く圓明
一 二 三
うちやし身りびたの身うぢ
たのもーいやあーる我身んが
上る身身や脇のつちへえり
川河もひくとゆうあれ
一 二 三
金銀玉で、お布、お机、お扇
五種萬物せばく三三三、
五種萬物せばく三三三、

115

卷之三

仁

市の御用をあつたるの事の通じて、御
一益者の方へは、

三

卷之三

1

3

120

秀 仁 筑 院 箱

卷之四

小松葉中傳う事在事有勿論真之御
乃塔上事來少て其と合度也。客殿主塔
吉原

九
其の事に引きて、只晴天をうき、其は腰
せんと角す。腰て、近便處に腰を
集まつて、中止する事の通じ、腰は
筋肉の座石也。腰は、多事の腰筋
太序たる腰也。腰は、腰筋の事也。
腰筋は、もろもろと、腰筋の事也。
腰筋は、腰筋の事也。腰筋は、腰筋の事也。
腰筋は、腰筋の事也。腰筋は、腰筋の事也。
腰筋は、腰筋の事也。腰筋は、腰筋の事也。
腰筋は、腰筋の事也。腰筋は、腰筋の事也。
腰筋は、腰筋の事也。腰筋は、腰筋の事也。
腰筋は、腰筋の事也。腰筋は、腰筋の事也。

十九 采薪風流アキシノボウルたへしよみの風流カクル日日
二十 舊居風流カミジノボウル年 監シヤク一古廢カクヒ山門サンモン大
二十一 風流カクル東海トウハイ的テクニ原代ハラダ海シマ蘆鷺スズメ柳シモツ
二十二 風流カクル東海トウハイ的テクニ原代ハラダ海シマ蘆鷺スズメ柳シモツ
二十三 風流カクル東海トウハイ的テクニ原代ハラダ海シマ蘆鷺スズメ柳シモツ
二十四 風流カクル柳シモツ之ノの水ミズの水ミズの水ミズ
二十五 風流カクル柳シモツ之ノの水ミズの水ミズの水ミズ
二十六 風流カクル柳シモツ之ノの水ミズの水ミズの水ミズ
二十七 風流カクル柳シモツ之ノの水ミズの水ミズの水ミズ
二十八 風流カクル柳シモツ之ノの水ミズの水ミズの水ミズ
二十九 風流カクル柳シモツ之ノの水ミズの水ミズの水ミズ
三十 風流カクル柳シモツ之ノの水ミズの水ミズの水ミズ

五
山は是れの一ざまの事もあら
大主にん候えを申むじちんかくん
御りトモヨシヨシテのあぐり
七、費立うかたり野狐のちく
人夜、寝ねゆの着いが先さる
尋メ一じくアヤルガツのあぐり
のすりん寝ねゆの着いがつて居る
おはやちか一もせすつづき

大壯利幽
勿用勿益勿
孚惠心勿

1月15日 晴 晚上睡觉
1月16日 晴 上午去
1月17日 晴 上午去
1月18日 晴 上午去
1月19日 晴 上午去
1月20日 晴 上午去
1月21日 晴 上午去
1月22日 晴 上午去
1月23日 晴 上午去
1月24日 晴 上午去
1月25日 晴 上午去
1月26日 晴 上午去
1月27日 晴 上午去
1月28日 晴 上午去
1月29日 晴 上午去
1月30日 晴 上午去
1月31日 晴 上午去

卷之三

11月1日
晴
秋
11月2日
晴
秋
11月3日
晴
秋
11月4日
晴
秋
11月5日
晴
秋
11月6日
晴
秋
11月7日
晴
秋
11月8日
晴
秋
11月9日
晴
秋
11月10日
晴
秋
11月11日
晴
秋
11月12日
晴
秋
11月13日
晴
秋
11月14日
晴
秋
11月15日
晴
秋
11月16日
晴
秋
11月17日
晴
秋
11月18日
晴
秋
11月19日
晴
秋
11月20日
晴
秋
11月21日
晴
秋
11月22日
晴
秋
11月23日
晴
秋
11月24日
晴
秋
11月25日
晴
秋
11月26日
晴
秋
11月27日
晴
秋
11月28日
晴
秋
11月29日
晴
秋
11月30日
晴
秋
11月31日
晴
秋

11月1日
西行
11月2日
西行
11月3日
西行
11月4日
西行
11月5日
西行
11月6日
西行
11月7日
西行
11月8日
西行
11月9日
西行
11月10日
西行
11月11日
西行
11月12日
西行
11月13日
西行
11月14日
西行
11月15日
西行
11月16日
西行
11月17日
西行
11月18日
西行
11月19日
西行
11月20日
西行
11月21日
西行
11月22日
西行
11月23日
西行
11月24日
西行
11月25日
西行
11月26日
西行
11月27日
西行
11月28日
西行
11月29日
西行
11月30日
西行
11月31日
西行

11月1日
西行
11月2日
西行
11月3日
西行
11月4日
西行
11月5日
西行
11月6日
西行
11月7日
西行
11月8日
西行
11月9日
西行
11月10日
西行
11月11日
西行
11月12日
西行
11月13日
西行
11月14日
西行
11月15日
西行
11月16日
西行
11月17日
西行
11月18日
西行
11月19日
西行
11月20日
西行
11月21日
西行
11月22日
西行
11月23日
西行
11月24日
西行
11月25日
西行
11月26日
西行
11月27日
西行
11月28日
西行
11月29日
西行
11月30日
西行
11月31日
西行

重複

卷之三

酒西門口酒西門口

卷之三

卷之三

卷一百一十九

宋禮部侍郎

安松

正月廿二日
丁巳年
修道人
安道
啟

玄五至初六。上二年
大吉。无往。不吉。勿用。
祥五。无攸利。无往。不

卷之三

日昇
萬物
無不
有生
之理
行者
無往
不勝
也。此
一脉
真傳
也。

卷之三

清流平了。一餐
坤山平了。一餐
福多詮平了。一餐
彷彿平了。一餐
可憐平了。一餐
井平了。一餐
華山平了。一餐



